

縄文語による地名語源の解釈

— 山名の例を中心に —

Interpretation on the Present Place Names in Terms of JOMON Language

— Focused on Names of Mountains —

永田 良茂 (縄文地名研究者)

Yoshishige Nagata (JOMON Place Name Reseacher)

神戸市北区泉台 2-9-9

2-9-9,Izumidai,Kita-Ku,Kobe-City,Japan

あらまし：我が国では地名学が成り立たない。幾世代も引き継がれてきた貴重な文化財である地名が、昨今、簡単に消されたり、根拠のない語感のみで新しく作られる傾向があり、単なる記号としか扱われていない。「縄文語はアイヌ語に引き継がれ、原型を残している」という仮定の下に、各地の縄文地名の意味を明らかにし、地形と照合出来るものであるという多くの結果を得られれば、縄文語・縄文地名の証明に繋がるはずである。本稿ではその考え方の概要、古代人の自然に対する感じ方やアイヌ語・日本語の関係などの概要を述べて、アニミズム(人体語)と言われる地名例、特に山地名を中心に具体例を地形で示す。

Summary: In Japan, Toponymy (study of place-names) has not been established. For generations, traditional place-names have been preserved and also been precious cultural assets. But, in recent days, they are sometimes changed with new names made with cheap feeling. It looks like that place-names are now considered as non-cultural symbols. Here, we have a hypothesis that JOMON language is taken over to the AINU language that keeps primitive meanings. Based on the hypothesis, it could be shown that most of place-names can be interpreted in terms of JOMON language, similar to AINU language, by detecting coincidence between each of place-names and description of its geographical features in terms of JOMON language. In this paper, a method to compare place-names with JOMON words is presented. It is also discussed what the ancient JOMON people thought of the nature and how it was to be related to AINU language and the Japanese language. Finally the so-called animism is illustrated by some examples of place-names and their geographical features.

キーワード： 縄文地名、アイヌ語、語源、地形、アニミズム、地名学

Keywords :JOMON place-name, AINU language, Etymology, Geographical feature,
Toponymy

1. はじめに

「縄文文化はアイヌ文化にひきつがれた。」と梅原猛は著作などを通して言われている。[1]、[2-5] などこのことは、アイヌ語の地名用語で地名を読み解き、当時の考え方を想定し、その結果が当時の生活条件や地理条件に合致するものである多くの例を提示することで証明出来ると考えている。

故、知里真志保はアイヌ地名を調べる人のため「地名アイヌ語小辞典」等を残された。[6, 7] 抱合語であるアイヌ語の語源分析などを通して、アイヌ語の基本単語としても貴重であり、アイヌ語語源分析方法が地名を解読する上で重要であり、日本語の語源を探る上でも必要であると考えている。

一方、地名に関して日本語語源学の吉田金彦は

「地名学の三大要素は歴史・地理・言語の三科学が基本」と述べられ、我が国の地名研究の必要性を述べられている。[8]

今日までの歴史、言語学の誤った方向、または未熟な結果が地名研究停滞の一因に思える。

(先生方の敬称は省略させて頂く。)

2. 地名の位置づけ、言葉の位置づけなど

(1) 地名の位置づけ

狩猟・採集・漁労生活をしていた古代人にとって、文字のない口こみだけの社会にあって、地名がどのように名付けられ、伝えられてきたかを推定し、現状の地名の位置づけを考えてみよう。

表1. 縄文地名の発生と推移の推定

1 名付けられた当初の地名(縄文地名)	<ul style="list-style-type: none"> 当時の言葉で誰もが分かるもの(口承伝承としての地図機能) 生活環境や地形の特徴をよく示し、ユニークな場所を特定できた。(行動範囲の場所特定機能) 地名用語としての言葉は広く共通に使われていた。(共通地名が広く分布している)
2 弥生時代以降の地名の扱いは?	<ul style="list-style-type: none"> 生活・文化の大きな変化に対してもそのまま継続して使われたものも多かった。 地名の言葉の元の意味は全く失われてしまった。(縄文語・縄文文化は急激に失われた。) 漢字地名として宛われた地名は当時の音韻を大事に引き継いだ。(漢字による当て字表記)
3 現状の地名研究に対する私見	<ul style="list-style-type: none"> 古い文献や伝承をもとに地名を解釈している。(ヤマト言葉や漢字による解釈で縄文地名としては間違っただけ) 神名および人の苗字や名前から地名が生まれたと考えている例が多い。(通常は地名が先では?) 当てられた漢字をもとに地名語源と考えている場合も多い。

(2) 古代人の自然感、地名の考え方

縄文時代は約1万3千年前に始まり、約1万年平穩に続いたと言われているが、地理的な変化を考えると、とても平穩無事と思われる状況ではなかったであろう。縄文時代を取り巻く地理的歴史観から特徴的な事柄を取り出すと、約2万年前まで氷期の最終段階を迎え、海面は現在より約100m低く、日本列島は北は樺太を介して、西は朝鮮半島を介して大陸とほとんど繋がっていた

が、温暖化が始まり約5千5百年前には温暖化のピークを迎え、海面は現在より約10m高く、日本列島も細々となっていた。その後、波状的に温暖化、寒冷化を繰り返し、現状に至る。

厳しい自然環境の中で、太地、山や川などを手に負えない人の力の及ばない、どうしようもできない生き物として考えたのは当然と思われる。一般的にアニミズムや自然崇拜といわれている。

そのような中で、山を頭に見立てたり、岬をアゴや鼻と見たり、多くの地名でアニミズムの世界を見ることができる。

(3) 縄文文化・言葉の位置づけ

縄文文化が始まる以前の旧石器時代は、大型の野獣を追って大陸から人が渡ってきたが、温暖化と共に南から海を渡ってきた人々の生活と共に縄文文化が始まったと考えられる。

縄文文化、縄文語を取り巻く歴史経緯は下記のようなものである。

表2. 縄文時代を取り巻く文化・言語に関する歴史観

年代	事項	内容	特記事項
旧石器時代			
1. 3万年前まで	移動、狩猟生活	石器を用い、大型獣を追い求める狩猟生活 大陸とほとんど接続しており、文化・言語のボーダレス社会であった。	マンモスハンター達の到来
縄文時代			
1. 3万年前から	土器出現	定住生活の始まりと共に縄文土器の出現により生活革命が始まる。大陸と切り離され、列島化と共に独自の文化・言語が発展する。	縄文土器の各地出現
5千年前頃	文化の均一化	温暖化と共に人々の移動で文化・言語の共通化が促進される。	人口の東北・関東地方への偏在
2. 3百年前まで		人々の間では平和な生活が約1万年間続き、好奇心旺盛な人々は土地土地に生活や文化や地形特徴を伝える地名を細かく名付けた。	縄文地名
弥生時代			
2. 3百年前から 数百年間	倭国大乱	水田稲作技術と共に軍事・政治ノウハウを携えた人々の到来は新たな文化や生活革命を起こした。	
古墳時代以降			
1. 7百年前から	弥生語化進展	縄文文化・縄文語は早々に消滅していった、忘れられた。	
	古い文献	最も古い文献である古事記、日本書紀、各地の風土記の地名説話はとってつけたたわいない説話であり、完全に縄文語、縄文地名の意味が消滅したことを伝える。	縄文地名の元の意味の消滅
	地名の文字化漢字化	地名の音韻は大事にされ、漢字地名化されたが、意味は乖離していったものが多い。	縄文地名の扱い

(4) 日本語とアイヌ語

片山龍峯はその著作〔9〕において、日本語とアイヌ語の語意において、いくつかの視点から姉妹語であることを追求されている。

一般的な共通点、相違点は下記のようなものである。

表3. 日本語とアイヌ語比較

共通点

No	項目	備考
1	語順が同じ	単語の置き換えで相互互換可能
2	単語の母音 5母音	一時期、上代8母音説はあったが
3	名詞の複数形がない	
4	多くはないが共通の単語	語根の共通性、動詞の共通性は多く指摘されている

相違点(現代日本語に対してアイヌ語の特徴)

No	項目	備考
1	子音終わり(閉音節)の単語が多い	方言では閉音節単語は各地に見られる
2	濁音がない 子音はk, s, t, n, h, m, y, r, w, p, (ch)の10または11種	正確には濁音も清音も区別しない 子音の表し方は異なる方法を探られる人もいる
3	動詞の活用形がない	動詞の過去形、未来形などない 片山龍峯は日本語動詞の未然形と同じものが多いことを指摘
4	一部の動詞は複数形がある	もともと別の動詞と言われている
5	名詞の三人称形(強調形)では語尾が変わるものがある(閉音節が開音節へ)	日本語の開音節化と関係あるか?
6	語頭に r 音が立つものが多い	日本語古語には語頭の r 音は無かった(古朝鮮語など)とするウラルアルタイ語系説も一時あった
7	単語に二重母音はない	語根レベルの単語に対して知里真志保先生の主張(地名においては重要)
8	単語に二重子音はない	語根レベルの単語に対して知里真志保先生の主張(地名においては重要)
9	基本的な語彙に多くの単語がある 頭に対して pa, pake, sapa, key, rum, e など	日本語でも方言を含めると多いものがある
10	抱合語的特徴 分子の単語に対して、原子の単語から合理的に構成されている。例 (etu:鼻)は(e-tu:頭、顔・峰)から	北方からの混入と言われる (kotan:村)、(itanki:腕)、(chasi:砦、柵)などと異なり、古い語源が明確

梅原猛は著書〔4〕において、日本語古語の動詞の中で約半数がアイヌ語動詞と何らかの関係があると指摘されている。

地名への摘要に関して、地名用語としてのアイヌ地名用語の基本単語を覚えた上で、上表との関係に置いて、次のようなことを留意すると、アイヌ・縄文語への変換を容易に行うことができる。

- ・地名の漢字に惑わされず、音韻を正確に読む。
- ・語源分析法を有効に使う。(相違点10項の応用)

- ・濁音は清音に置き換える。(相違点2の応用)
- ・子音終わりの単語の語尾は変化しやすい。(相違点1)

*子音が取れるもの

*母音が追加されるもの(相違点5の応用)

- ・二重母音の単母音への変化(相違点7の応用)

例 so-nai: 滝川 → so-ne: ソネ

ar-moy: もう一方の入り込んだ所

→ arima: 有馬

- ・二重子音の単子音への変化(相違点8の応用)

例 atuy-ta: 海の所 → atuta: 熱田

inaw-pa: 幣場、祭場 → inaba: 稲葉

3. 縄文語・縄文地名の理解の仕方

先述の梅原猛、片山龍峯など「縄文語はアイヌ語に引き継がれた。」などの言語に関するものである。地名などに関しても著書〔11,12,13,14〕など各地にアイヌ語地名が多いことを指摘されている。

筆者の方法は下記のような演繹法的な三段論法である。

- ・前提1. 縄文語はアイヌ語に引き継がれ、原型を残している。(仮説)〔1-5, 15, 16〕等梅原仮説とでも呼べるものであろう。

- ・前提2. 地名は数千年の使用に耐えるものが多い。

たとえ、文化・言語が変わっても地名はそのまま使われる例が多い。北海道のアイヌ地名などすっかり日本語地名として定着している。ハワイの地名も多くが現地のポリネシア語で貴重に残されている。〔17〕

- ・結論: 前提1. および2. の結果、多くの地名がアイヌ語地名用語で読み解け、かつそれらが歴史的地理条件または歴史的文化的条件に合えば前提1. および2. は認めることができる。

歴史的地理条件とは縄文時代の地形や地理特徴など、現在に残され保っていると推定出来ること、また、歴史的文化的条件についても、縄文人の生活や行動様式に照らして当時の状況を推定出来るものなどであろう。

地名をアイヌ語で読み解ける例として、先述の大友幸男、鈴木健や小島俊一の著書例があり、地形などと照合した例は拙書〔18〕でも多くの例をあげた。

ここでは縄文時代から地形の特徴を残していると思われる山名を中心に、言葉の意味と地形図と山容などの目視地形とを照合してみよう。

4. 地名の具体例、山や岬名を中心に

(1) 太地の頭としての山の例

古代人は太地を生き物と考え、山をその頭と考えていた。アイヌ語で「頭」に相当する単語は e-pa, pake, sapa, key, rum などあり、これらの言葉を含むと思われる山名例を見てみよう。

なお、各地名・山名などの説明を以下の順で列記する。

- ・地名・山名など 漢字読み
- 縄文地名相当 アイヌ語地名用語 日本語訳
- その他参考事項
- 場所 住所 標高 m
- 地形図 20万分の一または4万分の一の縮小地形図
- 山容 カシバード撮影像
- (地形図から復元した疑似目視図)

地形図、山容図はダン杉本氏の提供されている「カシミール地図」から、フリーソフトを活用させて頂いた。

1) e- に関する山の例

- ・恵庭岳 エニワダケ [6] から
- エニワ e-en-iwa:頭・尖っている・岩山
- 下記の他、e-en の例
- 山梨県塩山(塩山(イガ)市)市 塩ノ山
- 福井県福井市円山(イガ)1丁目 など
- 北海道千歳市



南から見た恵庭岳



・恵比須岳 エビスダケ

エビス e-pis-un:頭・浜(尾)・ある
(頭が尾を向いている)

海老の語源と言われ、川の水源地も e- であり、水源が浜側にある場合にもエビス地名が多い。エビス信仰の関連地名と言われているが元々は山、川の地形に起因したものでしょう。

エビス地名としては恵比須、恵比寿、胡、夷、戎、蛭子、えびすなど、エビ地名としては海老、江尾、蝦、揖斐、えびのなど
岐阜県大野郡丹生川村 乗鞍岳の北の所
標高2,831m



南から見た恵比須岳



表4. エビス山の分布

No	読み	漢字地名	またの名	場所	標高m
1	エビス	恵比須籠山		青森県下北郡佐井村	283
2		恵比須森		岩手県岩手郡松尾村、二戸郡境	1496
3		恵比須峰	二ツ峰	新潟県新発田市、北蒲蒲郡境	1462
4		エビス大黒の頭		群馬県利根郡、新潟県南魚沼郡境	1888
5		恵比須岳		岐阜県大野郡丹生川村	2831

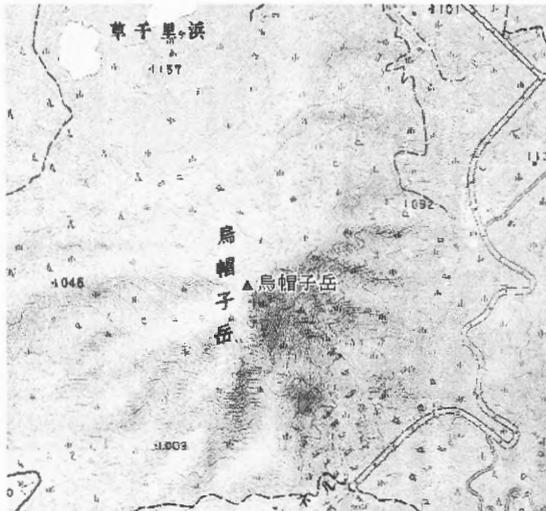
・烏帽子山 エボシヤマ

エボシ e-po-us-i:頭・子供・つく・もの
(山/山頂に小山がある山)

烏帽子は神主がかぶるものであるが、帽子の語源と言われている。アイヌ語の(e-pa-us-i:頭にいつも乗っているもの)から出たものと同じであろう。地名の場合帽子の語源よりは上記が正しいのでは。

熊本県阿蘇郡白水村、長陽村境

阿蘇山内輪山、火口の西南、草千里の東
標高1,337m



烏帽子山の南東約1Kmから見た所



北海道から鹿児島まで、烏帽子山が43カ所
烏帽子岳が58カ所確認出来た。

2) pa,pake,sapaに関するもの

・八甲田山 ハッコウダサン

ハッコウダ

pa-ukaw-ta:頭・重なり合い・所
(山/山頂が重なり合っている所)

pa → ha/wa 音韻のゆるみ現象と言われている。



西北の上空2,100mから見た八甲田山



・博士山 ハカセヤマ

ハカセ pa-kas:頭・越える
(山頂を越える(道のある山))

福島県河沼郡柳津町、大沼郡境

標高1,482m



西から見た博士山山容



・羽毛山 ハゲヤマ

ハゲ pake:頭、頭の所

福島県南会津郡伊南村、檜枝岐(ヒヱマ)村境

標高1,347m



北から見た羽毛山



・佐和山 サワヤマ

サワ sapa:頭、前に出た頭

滋賀県彦根市 標高 233m



石田三成の居城であった、戦略上の要所
北西の琵琶湖湖岸上空から見た和田山



沖縄、読谷村の残波岬、青森県南津軽郡大鰐町鯖石、福井県鯖江市など

・筑波山 ツクバサン

ツクバ tuk-pa:突く・頭

(突き出している山頂)

茨城県つくば市、真壁郡真壁町、新治郡八郷

町境、 877m



南から見た筑波山



左山頂が男体山、右が女体山

・稲葉山 イナバヤマ

イナバ inaw-pa:幣場・頭

(幣場、祭場の山/岡)

福島県相馬郡飯館村



ここでは集落の裏山が祭場に使われた。

関連地名：

イナバ地名 稲葉、因幡、稲場、稲庭、
伊奈葉など

イナオ地名 inaw:幣場、祭場
稲尾、稻生など

イナサ地名 inaw-san:幣・棚
 稲佐、引佐、伊那佐など
 イナリ地名 inaw-ri:幣場・高台
 稲荷、稲成、飯生、伊成、
 居也など

表 5. イノウ関連山名の分布

読み	漢字地名	またの名	場所	標高m
イナ	稲生山		長崎県島原市	820
イナ	稲尾岳		鹿児島県肝属郡内之浦町、佐多町境	930
イナ	稲葉山		福島県相馬郡飯館村	506
イナ	稲葉山		富山県小矢部市	347
イナ	稲葉山		鳥取県鳥取市、岩美郡国府町境	249
イナ	因幡三山	面影山	鳥取県鳥取市、岩美郡国府町境	100
イナ	因幡三山	甌山	鳥取県岩美郡国府町	100
イナ	因幡三山	今木山	鳥取県岩美郡国府町	89
イナ	伊那佐山		奈良県宇陀郡榛原町	637
イナ	稲佐山		長崎県長崎市	340
イナ	稲荷山		青森県北津軽郡小泊村	30
イナ	稲荷山		岩手県盛岡市	322
イナ	稲荷山		岩手県盛岡市	233
イナ	稲荷沢山	稲荷山	秋田県由利郡、雄勝郡羽後町境	324
イナ	貝鳴山		福島県南会津郡田島町	1222
イナ	稲荷山		栃木県黒磯町	298
イナ	稲荷山		茨城県久慈郡大子町	461
イナ	稲荷山		長野県南佐久郡臼田町	750
イナ	稲荷山		鳥根県八束郡美保関町	254
イナ	稲荷山		滋賀県高島郡新旭町	180
イナ	稲荷山		静岡県引佐郡引佐町、細江町境	75
イナ	稲荷山		京都府京都市	233
イナ	稲荷山		大阪府泉南郡岬町	60
イナ	稲荷山		和歌山県海草郡野上町	319
イナ	稲荷山		和歌山県東牟婁郡古座川町	365
イナ	稲荷山		岡山県高梁市	418
イナ	稲荷山		岡山県児島郡瀬崎町	154
イナ	稲荷山		香川県高松市	166
イナ	稲荷姫塚	紫雲山	香川県高松市	170

3) rum に関するもの

- ・鶴見岳 ツルミダケ
 ツルミ tu-rum-i:2つ・頭 (双頭山)



南から見た鶴見岳



(4) key に関するもの

- ・鶏頭山 ケイトウザン
 ケイトウ key-tu:頭・峰 (山の峰の山)
 key-tu-o:山峰の裾
 key-tuk:頭・突き出す
 岩手県稗貫郡大迫町、下関伊郡川井村境
 標高1,445m



西のやや上空から見た鶏頭山



左は毛無森、中央手前から鶏頭山、中岳、

(2) 小山を子供と表現した例

・穂高岳 ホダカダケ

ホダカ po-ta-ka: 子供・切り立つ・上手
(小山が切り立っている上手)

長野県南安曇郡安曇村、岐阜県吉城郡上宝村
境 3190m



南から見た穂高岳／奥穂高岳



左側に西穂高岳、右側に明神岳、前穂高岳
中央が穂高岳

・武尊山 ホタカヤマ

ホタカ po-ta-ka: 子供・切り立つ・上手
(小山が切り立っている上手)

群馬県利根郡水上町、川場村境 2158m



南から見た武尊山

中央が武尊山



日本武尊（ヤマトタケル）の伝承から付けられた漢字地名

・面白山 オモシロヤマ

オモシロ o-mo-sir-o: 山裾・子供・山・多い
(山裾に小山が群在する)

宮城県仙台市、山形県山形市境 1264m



東から見た面白山

関連地名として、オモロ沢もある



山梨県南巨摩郡大島の小室（杵）沢の山容



中央やや下の丸い山の麓がオモロ沢、右手の小さい山の麓が馬込（マゴメ）手前は富士川
小室沢 オモロ o-mor-o

川口・岡・多い

馬込 マゴメ ma-kom-e

小さい・コブ・山

面白内（オモシロナイ）川地名もある。

5. 地名分類とそれらの代表例

拙稿 [19] から例を示す。

表 6. 縄文地名例の分類

No	大分類	地名例	縄文語解釈例	元の意味	備考
1 神事に関する地名例					
		稲佐山など	inaw-san	幣・棚	祭場; 引佐、稲佐神社など
		茶臼山など	chasi	砦、館	祭場
		愛宕山など	a-tapkop	我らが・タンコブ山	祭場; 愛宕神社など
		金毘羅山など	kamuy-pira kom-pira	神・崖 コブ山・崖	祭場; 金刀比羅、金毘羅、 金比羅、金比良、琴平神社など
		足立山など	a-tat-i<a-tar-i	我ら・踊る・所	祭場; 足立神社、安達神社など
		権現山など	kom-ke	コブ山・所	祭場; 権現神社など
		三田など	(kamuy-)mintar	神の遊び場、庭	三田(ミタ)、三原、三春神社など
2 自然地名例					
-1 山(岡)地名					
		毛無山	kenasi <kene-us-i	川岸の木原、雑木林 ハンノキ・群生する・所	毛無森、怪無山、毛根など
		駒ヶ岳など	kom-ka-ta-ke	コブ・上手・切り立った・所	駒形、駒頭、駒見、昆布山など
		浅間山	asam <a-sam	奥まった所 我らの・側	浅間神社もある。
		宇部	humpe <hur-pe	鯨(岡) 岡・もの	
		百合	i-hur-i	それ(神)・その岡	
-2 岬(山崎)地名					
		江戸地名	etu	鼻	別表 参照
		ノツ地名	not not-kew	顎(アゴ) 顎骨	野津、野付、能登、野戸など 野毛、野木、能義など
		サバ/サタ地名	sa-pa san-pa sa-ta	前・頭 前に出る・頭 前・所	佐波、鯖江、佐波江など 残波、三波など 佐田、佐多、佐太、佐田、佐陀など
		エサキなど	e-san-key e-sa-us-i	そこに・前に出る・頭 頭・前・つく・もの	江崎、恵山 江差、江刺、枝幸など
		長崎など	na-ka-san-key	水・上手・前に出る・頭	長崎(山)、中崎、永崎など
-3 海(湖)地名					
		アツミ地名など	atuy-muy	海/湖・入江	渥美、温海、熱海、安住、安曇など
		ルリ地名	rur	海/湖	るり沼、瑠璃、瑠璃溪など
		セト地名	sep-to	広い・海/湖	瀬戸、摂津など
		静岡	si-to-o-ka	大きい・海・そこ・上手	
-4 川関連地名					
		ナカ地名	na-ka	水・上手	那珂川、中川、那賀川など
		ソネ地名	so-nay	滝・川	曾根、仲宗根、庄内、管内など
		ソベ地名	so-pet	滝・川	楚辺、曾部など
		タタラ地名	tattar	(水流が)踊り踊りする	多々良川、竜田川、多田川など 滝名、海岸名との関連
		ワダ地名など	wattar	水のよどみ、淵	和田、渡、亘理、渡利など
		服部地名	hattar	淵	服部
		トネ地名	to-nay	海・川	利根川、刀根山など
-5 その他の自然地名					
		オタ地名	ota	浜、砂浜	小田、尾田、織田、太田など
		ウラ地名	ura <uta	浜、砂浜	各地の浦地名
		サン(ダ)地名	san san-ta	(大水が)出る (大水が)出る・所	三内(丸山遺跡)、三瓶川 三田(サンダ)など
		サカ地名など	sa-ka sa-ka-i/ta	砂浜・上手 砂浜・上手・所	嵯峨、佐賀など 堺、坂井、酒田、境港など
		キサ地名	kisar	耳	伊岐佐、木在(キサラ)、木更津、吉舎など
		ツシマ地名	tu-suma/sima	二つ・岩山/島	対馬、津島など
		マツ地名	matu	入り込んだ入江	長崎、佐賀県の松浦地名など
3 生活・文化地名					
		相生地名	ay-o-i	イラクサ・群在する・所	相生地名は都市には多い。 イラクサは古代人の糸、麻布の材料 生田、菊田、菊水など
		イク(タ)地名	i-ku-ta	それ・呑む・所	筑紫(福岡)
		チクシ地名	chi-kus-i	我ら・越す・所	古代の交通の難所、橋のない川
		カスガ(イ)地名	kas-ka-i	徒渉する・上手・所	春日、春日井など 古代の交通の難所、橋のない川
		アビコ地名など	apir-ko	獣道・所	阿毘縁(アビレ)、我孫子、安孫子など 狩猟場
		結城地名など	i-uk-i	それ(獲物)・取る・所	由岐、結城神社など

上記表の中で岬、山崎地名の地名である、エド地名は特筆すべきものがあり紹介する。なお、地形としては現在の皇居、江戸城の辺りのエド、かつては古河内湖／海と呼ばれ、大阪城の辺りに突き出した岬であったイズミ地名など地形として失われているものもある。

表 7. いろいろな「エツ」地名例

e-tu: 頭、顔の山峰・地名としては岬、山崎の代表

エツの変化 e→エ、イ tu→ツ、ツ、ト、ド、トウ、ズ など

読み	地名語源	意味	地名例
エツ／エツ	etu	鼻、出崎	金江津、直江津、江津など 江月、江辻、越地、餌釣、道悦、恵塚、狄塚(エツカ)、八重津など
エト／エド	etu	鼻、出崎	江戸(／井／塚／崎／川／岡など)など 江渡、恵土、丙(エド)、井戸(石／井／沢)、声間(コエトイ)、越渡、越戸など
エトウ／エドウ	etu	鼻、出崎	江東、江藤、絵堂、江堂、恵堂など 越道、笛堂など
エス／エズ	etu	鼻、出崎	江洲、画図、絵図、江頭(川)など 江住、江須(賀／崎／之川)、江出(エズル)など
イツ／イツ	etu	鼻、出崎	伊津(／井／部／賀など)、伊豆など 焼津、居土、出雲(イツモ)など
イス／イズ	etu	鼻、出崎	伊豆(／野／穂／島／木／林／山／尾／味など)、伊須など 泉井、出井、井随、出(羽／目／流／淵／後／間／角／灰など)
イズミ／イズミ	etu-muy	出崎・入江	泉、和泉、伊豆見、伊豆美、出水、泉美、泉水、出海、井澄など 夷隅(郡、町、川)、伊住、居住など 出島(イズシマ)、巖原 泉(谷／野／名／平／田／岡／原／山／寺／宮／池／川／郷／窪／下／ケなど) (大／藤／有／湊／本／小／今／豊／平／岩／飯／白／徳／栃／米／島／福／中／増／祖など)泉など
イズモ	etu-moy	出崎・入江	出雲(／崎／壇／井／岬など)、 出本など
イズシ	etu-si	出崎・大きい	出石、井園子など (逗子、厨子、図師、都志(つし)なども同類)
イト／イト	etu	鼻、出崎	伊都、井登、伊戸、糸(／井／魚／田／島／永／下／我／岐／谷／野／満／米など)、井戸、井土など 糸魚(イトイ／イトヨ)、井戸(居／石／内など)、飯土井など
イトウ／イトウ	etu	鼻、出崎	伊東、伊藤、位登、板生、糸生など 伊藤田など

6. おわりに

地図を見ながら地名と地形をを追いかけ、縄文人の気持ちになって、縄文地名として読んでみる楽しみを伝えたかった。

多くの地名が縄文語・縄文文化の反映として見ることができるという立場から、いくつかの例を見てきたが多くの地名語の語源分析とその意味における地形との照合が、梅原仮説の正しさを証明する方法であると確信出来る。

このような地名のデータベース化を進め、多くの人に理解して頂き、広めることが急務であると考えている。このことが歴史認識、日本語語源などの研究にも役立つだろうと確信している。

最後に本発表に際し、ご紹介頂いた大阪通信大学小沢先生を始め、機会を与えて頂いた協議会の皆様に深く感謝いたします。

7. 参考文献

- [1] 梅原猛 日本語語源研究会発表資料から
アイヌ語と日本語 4回資料 1983/9
- [2] " " アイヌ語と日本語 15回資料1989/4
- [3] 梅原 猛、藤村久和 アイヌ学の夜明け 小学館
- [4] 梅原 猛 日本の深層 梅原猛著作集 小学館
- [5] 梅原、埴原 アイヌは現日本人か 小学館
- [6] 知里真志保 地名アイヌ語小辞典
北海道出版企画
- [7] " " アイヌ語入門 北海道出版企画
- [8] 吉田金彦 日本語語源研究会発表資料から
地名から枕詞へ 2002/10
- [9] 片山龍峯 日本語とアイヌ語 すずさわ書店
- [10] 山田秀三 北海道の地名 草風館
- [11] " " 東北・アイヌ語地名の研究 草風館
- [12] 大友幸男 アイヌ語朝鮮語日本の地名散歩
三一書房
- [13] 鈴木 健 縄文語の発掘 新読書社
- [14] 小島俊一 岩手地名ものがたり 熊谷印刷
- [15] 吉田金彦 日本語語源研究会発表資料から
琵琶湖にはアイヌ人がいた 1989/4
- [16] " " 京都市に残るアイヌ語地名 1990/6
- [17] Albet J. Schutz ハワイ語のすべて 2002
ISLAND HEITAGE
- [18] 永田良茂 古代人の心で地名を読む 友月書房
- [19] 永田良茂 日本語語源研究会発表資料から
縄文地名の証明方法と場所特定の地名用語例2003/6